

『戦争を知らないことを実感できた時代』に生まれて

M.U. 1965年生まれ♀ 子供の時は動植物や社会問題への関心が強かったが、社会に出た時はバブル景気の真っ盛り。それに巻き込まれたのか証券会社に就職して企業調査に従事。その後、公認会計士の資格を取得し、キャリアをリセット。非営利セクターへの関心から 21 世紀社会デザイン科に 入学するに至る。職場では戦争の話をするのではない。

私が物心ついて最初にみた外の世界は、千葉県松戸市の常盤平団地の周辺だった。1960年代後半のことである。子供だからわからなかったのかもしれないが、敗戦から 20 年が経っており、戦争があったことを意識させるものは、ほとんど記憶していない。

また、身内に、戦地での経験を直に聞ける人はほとんどいなかった。1931 年生れの父は戦時中には若過ぎ、祖父の世代は高齢過ぎ、どちらも徴兵されていない。そもそも父方母方の双方の祖父は、私が生まれる前に亡くなっていた。戦時中に両親は、それぞれ下関と福岡の郊外で暮らしており、爆撃を受けた経験もなかった。

でも、戦争体験者が身近にいないでも、「今の世の中は戦争が終わったからこそある」「自分は戦争を知らない子供で気楽で幸せらしい」と感じる機会に事欠かなかった。

小中学校の授業では、戦争中の話を家族から聞いて発表したり、作文を書いたりする機会が設けられていた。学校の夏休みの登校日は大概 8 月 15 日であり、戦争に関する何らかの行事が組まれていた。

中学校のときは大阪に住んでいたが、修学旅行は、長崎の原爆資料館を見学するスケジュールが毎年組まれていた。私の年次は一学年の人数が多く手間がかかるためか、学校がその修学旅行先の変更案を出し、PTA が反対したことがあった。ただ、その変更案も「広島」行きへの変更にとどまっていた。図書館では活字本が嫌いな男子が「はだしのゲン」を取り合っていたが、その隙をみて、私も読んでみたりしていた。

私の家族も、戦争による直接的な被害はなかったとはいえ、戦争に起因した生活環境の変化があった。両親ともにそれぞれの母親、私にとっては祖母が戦後の一家の家計を支えざるを得なかった。

父方の祖母は地主の妻であったが、夫をあてにできず、保険の外交員をして、五人の子供を育てた。中学校の教師であった母方の祖母は、戦前に夫を亡くしていたが、その性格から上司との衝突による幾度もの転勤を繰り返しながらも仕事を続け、二人の子供を育てた。父も母も、東京の大学への進学をあきらめざるをえなかったり、家族離れ離れで暮らさざるを得なかったりしている。あれだけの大戦争が起こったのだから、誰も全く影響を受けないということはいえない。もちろん両親の言葉の端々からも、戦争が終わったからこそその世の中であるということ、常に感じることはできた。

こうして振り返って思うのは、結局のところ「私が生まれた時は、戦争が終わって 20 年しか経

っていないかった」ということだ。奇跡的と言われた戦後復興により、街の外観からは戦争の痕跡が一扫されていても、人々の心の中にはその人なりの戦争の記憶が強烈に刻まれていたということだ。グアム島での横井さん、ルパン島での小野田さんの発見が報じられた時に、子供心に「戦争が終わっていないと思っていた人がいるなんて信じられない」と思い、またマスコミの報道もそのような基調であったと記憶している。しかし、それは、それほど珍しいことではなかったのではないかと、今になって思う。

そして今、子供がいないせいもあり、「この前の戦争」について、この国の若い人たちの意識や知識はどうなっているのか、想像がつかない面もある。学校ではどのように伝えているのだろう。やっていることは私がいた当時と変わらないかもしれないが、今では、「何とはなしに耳に入ってくる戦争の話」がほとんどなくなっているような気がする。このように戦争を見聞きしていない若い教師が教えていけば、効果は違ってくるのではないか。もう「自分は戦争を知らない」ということを自覚する機会すらない時代になってしまったのかもしれない。

そうした中で、親から戦争の話を少しでも聞いた世代なのに、その重要性を明確に意識しないまま、聞いた話もだんだんうろ覚えになっていることを、今、後悔している。